

幼稚園時の発達と小学校での発達との関連 － 3歳児3学期から小学校3年生1学期までの4年半に亘る検討－

A Study of Relation between Evaluation of the Preschoolers' and Primary schoolchildren's Development : The longitudinally investigation over four and half years.

長田 瑞恵¹⁾
Mizue NAGATA
加藤 陽子²⁾
Akiko KATOH

野口 隆子¹⁾
Takako NOGUCHI
関口 はつ江³⁾
Hatsue SEKIGUCHI

要 旨

本研究では同一の子どもについて、幼稚園3歳児クラスの3学期の発達評価の結果と、小学校入学後1年生から3年生までの発達と適応との関連性について検討を行った。幼稚園時は128項目からなる発達評価への評定を担任保育者に依頼した。小学校は発達評価や適応状態などに関する質問紙への回答を保護者と担任教諭に依頼した。その結果、3歳児クラス3学期での発達は小学校入学後の適応や発達と関連していた。特に3歳児クラス3学期の知的領域の発達と情緒的領域が、小学1年生から3年生までの様々な領域の発達や適応と関連することが示された。

1. はじめに

近年、幼児期から児童期への連続性の重要性や移行期の難しさについて、教育学の学問領域からも、実際の保育現場、教育現場からも様々な問題が指摘されている。その一方で、現代の

¹⁾ 十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科

Department of Early Childhood care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University

²⁾ 十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科

Department of Human Developmental Psychology, Faculty of Human Life, Jumonji University

³⁾ 東京福祉大学

Tokyo University and Graduate School of Social Welfare

キーワード：発達 幼児期 小学校低学年 適応 縦断研究

Development / Preschooler / Primary / Schoolchildren / Adaptation / Longitudinally Investigation

幼児の発達の実態を明らかにすることは重要である。なぜなら、近年、幼児の生活環境の変化による発達の問題が指摘されているからである (e.g., 仙田, 2005)。

そのため、これまで筆者らは、幼稚園卒園児が小学校の環境に適応していく過程について、幼稚園時の発達と小学校1年・2年時の適応との関連について検討してきた。

例えば、長田・野口・関口 (2005) は幼稚園を卒園した子どもが小学校の環境に適応していく過程には子どもの生活のどのような側面が関連しているのか、また、小学校適応は幼稚園時の発達と関連するのを中心として検討を行った。幼稚園時の発達評価は担任保育者、小学校適応に関する質問紙は子どもの保護者が回答した。その結果、小学校1年生の1学期の適応を尋ねる項目間での相関はおおむね有意であった。また、適応の良い子どもほど、勉強、身体状態、心の状態などが良好であった。そして、幼稚園時の発達評定と小学校入学後の様子の評定との間で相関係数を算出した結果、幼稚園時に発達が進んでいると、適応面もその他の側面も入学後の状態が良いことが明らかになった。加えて小学校1年生1学期において「先生に馴染んだか」が「学校でのことを話すか」「楽しいか」と関連していたことや、幼稚園時の発達と、入学後の「先生に馴染んだか」との関係が関連することから、小学校適応に担任教師との関係が大きな役割を果たしている可能性が考えられる。

また、同じ子どもたちについて、小学校2年生1学期の適応状態について調査を行った (長田・野口・関口, 2007)。その結果、小学校2年時の適応は小学校1年時の適応や生活諸側面と関連しており、小学校1年時に小学校へ適応しやすかった子どもは、小学校2年時も適応的になりやすいと言える。特に小学校1年時の適応項目の高さが小学校2年時の「勉強の楽しさ」と関連していたことから、小学校1年時でうまく適応できた子どもは、その後の学業的な達成がしやすいと言えよう。その一方で、小学校1年時の適応項目の一部が小学校2年時の「生活習慣のよさ」とは負の関連を示していた点は興味深い。小学校1年生から2年生にかけては、小学校生活にうまく適応していくことと家庭内での生活習慣が確立することとが両立しにくい可能性を示していると言える。さらに、幼稚園時の発達評価のうち、情緒的発達のみが小学校2年時の適応項目の中の友達関係と正の相関関係にあった。また社会性の発達が小学校2年時の生活諸側面と関連があった。幼稚園時の知的発達は小学校2年時の適応・生活諸側面とは関連がなかった。

この長田他 (2007) の結果を追試するために、長田・関口・野口 (2009) は新たにデータを収集し直し、幼稚園入園から小学校2年までの5年間に亘り、同一対象を縦断的に追跡し、小学校における適応と幼稚園時の発達との関連について、さらに詳しく縦断的に検討した。その結果、小学校1年時適応と幼稚園時の発達は、幼稚園3年間の発達と関連しており、特に、年少クラス時の発達との関連が多く示された。また、小学校1年時の生活諸側面も幼稚園時の発達と関連しており、特に「宿題や支度を自分からする」「勉強が易しい」という項目との関連が目立った。このことは、幼稚園時の発達が進んでいた子どもほど、小学校1年時に自立的で、勉学的にも適応しやすいことを示唆しているといえよう。加えて、小学校2年時の適応も、幼稚園3年間の発達と関連しており、特に、年少クラス時の発達との関連が多く示され、小学校2年時の適応項目合計との関連は知的領域をのぞくすべての領域で有意であった。しかし、小1時に比べて、幼稚園時の発達との関連は全体的に少なくなっていることが伺われた。このこ

とは、小学校入学直後には幼稚園時の発達の影響がかなり強く影響していたのに対し、次第に学校に慣れていくにつれ幼稚園時の発達の影響が薄れていく可能性を示している。

しかし、これらの研究は、幼稚園時の発達評価は保育者によるものである一方で、小学校における適応は子どもの保護者による評定と、評定者の子どもに対する立場が異なっていた。そのため、長田・関口・野口（2010）では小学校における評定を小学校担任教諭に依頼し、幼稚園、小学校ともに第三者による客観的な評価を用いることで、幼稚園時代に各園、各保育者による保育のもとで固有な経験をし、異なる経過をたどって発達している子どもたちが、どのように小学校生活に適応しているかをさらに詳細に検討した。その結果、全体的には、小学1年1学期の状態と最も多くの間連を示したのは幼稚園年長クラス3学期であった。特に小学1年1学期の適応合計と、幼稚園年長クラス3学期の知的領域、運動的領域、遊びの発達との間連が示されたことは興味深いと言えよう。また、長田・関口・野口（2009）では小学校時の適応・生活を子どもの保護者が回答したデータと幼稚園時の発達との間連を検討しているが、小1小2時の適応・生活は、特に、年少クラス時の発達との間連が多く示された。この結果は、本報告とは異なるものである。長田他（2009）と長田他（2010）の結果の相違の原因として、小学校時の適応・生活の評価者が異なることが考えられ、保護者の目から見た子どもの様子と、小学校教員の目から見た子どもの様子とが異なって評価されていた可能性がある。

これらの先行研究をふまえ、本研究ではさらに小学3年生のデータを収集し、幼稚園3歳児クラス3学期の発達と小学校1～3年各1学期の適応や発達との関係について検討を行う。幼児期の発達の様相が、その後の小学校の適応や発達に長期的に間連するのか、間連するとすればそれはどのような関係なのかを詳細に検討することは、昨今問題となっている幼児期から児童期への移行の連続性を考えるうえで貴重な基礎データを提供するものであろう。

なお、本研究では、幼稚園時の発達のデータとして3歳児クラス3学期のデータを使用する。その理由は、長田他（2009）において小1・小2の適応と最も多く間連が示されたのが3歳児クラス3学期の発達であったためである。

2. 研究方法

調査方法 基本的には質問紙調査を行った。

- (1) 幼稚園時発達評価:先行研究 (e.g., 長田他, 2005) と同じく、知的領域25項目、運動的領域20項目、情緒的領域25項目、社会的領域25項目、生活習慣17項目、遊び16項目、合計項目計128項目から成る発達評価を用いた。マークシートを用い、それぞれの項目について、「出来る・よくする」から「できない・しない」の5段階尺度で記入するよう依頼した。
- (2) 小学校生活調査 (小1、2、3年時実施) は保護者に質問紙を配布し、友達関係や先生に馴染んだかなどを質問した。小学校発達調査は小学校の通知表を参考に作成した質問紙を用い、担任に評価を依頼した。なお、本研究では、小学校1年時実施のものとは3年時実施のものについては、主に教師が評価した発達の側面に焦点をあてた分析を行い、小学校2年時実施のものは主に保護者が評価した適応面に焦点をあてて分析を行った。

使用した質問紙のうち、小学校1年生時に使用したものを資料として巻末に添付する。

調査対象 郡山市内の2つの私立幼稚園に通園していた子どもたちであった。最大で21名、最小で7名分のデータを分析に用いた。なお、表1で分析対象人数が19名となっているが、これは本報告で用いた相関係数の算出に19名分のデータを用いたためである。

調査時期 2005年3月（3歳児クラス）、2007年6月（小1・小2分）、2008年6月（小3）。

3. 結果と考察

幼稚園3歳児クラス3学期の6領域の発達の各平均得点と、小学1年生1学期・小学2年生1学期の生活調査の適応の平均得点、小学1年生1学期・小学3年生1学期の発達評価の平均得点との間の相関係数を算出した。その結果を表1に示す。

表1 各変数間の相関係数

	知的領域	運動的領域	3歳児情緒的領域	社会的領域	生活習慣	遊び	
1年	適応得点	0.19	0.19	0.28	0.11	-0.10	0.21
		19	19	19	19	19	19
	知的領域	0.78 **	0.63 *	0.65 *	0.41	0.66 *	0.30
		11	11	11	11	11	11
	運動的領域	0.62 *	0.50	0.62 *	0.45	0.29	0.24
		11	11	11	11	11	11
	情緒的領域	0.53 †	0.37	0.53 †	0.22	0.39	0.26
		11	11	11	11	11	11
	社会性	0.34	0.22	0.07	0.05	-0.02	-0.05
		11	11	11	11	11	11
生活習慣	0.60 †	0.48	0.65 *	0.41	0.34	0.17	
	11	11	11	11	11	11	
遊び	0.57 †	0.46	0.51	0.27	0.36	-0.04	
	11	11	11	11	11	11	
2年	適応得点	0.54 *	0.44 *	0.66 **	0.42 †	0.32	0.46 *
		21	21	21	21	21	21
3年	知的領域	0.79 *	0.62	0.64	0.32	0.71 †	0.64
		7	7	7	7	7	7
	運動的領域	-0.32	-0.32	0.26	-0.21	0.12	0.52
		7	7	7	7	7	7
	情緒的領域	0.74 †	0.51	0.83 *	0.09	0.59	0.43
		7	7	7	7	7	7
	社会性	0.22	0.14	0.40	-0.38	0.17	0.49
		7	7	7	7	7	7
生活習慣	0.70 †	0.59	0.94 **	0.15	0.46	0.36	
	7	7	7	7	7	7	
遊び (表現創造)	0.42	0.13	0.08	0.15	0.67	0.55	
	7	7	7	7	7	7	

上段はPearsonの相関係数、下段は分析対象者数。** : p<.01. * : p<.05. † : p<.10

3歳児クラス3学期での発達は小学校入学後の適応や発達と関連もしくは関連する傾向を示していた。特に3歳児クラス3学期の知的領域の発達は、小学1年生1学期の知的・運動的・情緒的領域・生活習慣・遊び、小学2年生1学期の適応得点、小学3年生1学期の知的・情緒的領域・生活習慣と関連し続けた。さらに3歳児クラス3学期の情緒的領域について、1年生や2年生の各変数との関連や関連傾向が示された他、3年生についても情緒的領域と生活習慣との関連が示された。また、3歳児クラス3学期の発達と小学2年生1学期の適応得点とは、生

活習慣を除いた5つの領域において関連が示された。

このように、3歳児クラス3学期の発達は、小学校入学時のみならず、小学校中学年に至るまでの発達や適応と関連し続けることが示された。特に、3歳児クラス3学期の知的領域と情緒的領域が、小学校3年生までの発達や適応と多くの関連を持つことが示された。

この結果は、幼児期から児童期への移行の連続性を考える際に、幼児期における育ちの環境や子どもたちとの関わりのある方について、非常に示唆に富むものであると考える。特に幼児期の情緒的側面の発達が後々の発達や適応と関連が強いということは、幼児期において大切にすべきものとは何かについて、再度考えるきっかけを与えるものであろう。

4. 今後の課題

幼児期、小学校入学後の各時期で用いている評価項目が若干異なるため、今後さらなる検討を継続する必要がある。また、新たな適応が求められる小学校高学年や中学校入学の際に、幼児期の発達が関連しているのか否か、関連するならばどのような形においてかなど、長期的な研究が必要である。さらに被験者数を増やした追試も重要であろう。

5. 文献

長田瑞恵・野口隆子・関口はつ江（2005）「幼稚園卒園児の小学校適応（1）—幼稚園時の発達との関連—」日本発達心理学会第16回大会，神戸大学。

長田瑞恵・野口隆子・関口はつ江（2007）「幼稚園卒園児の小学校適応：小学2年時までの縦断的検討（1）」日本発達心理学会第18回大会，埼玉大学教育学部。

長田瑞恵・関口はつ江・野口隆子（2009）「幼稚園時の発達と小学校適応との関連（1）—幼稚園入園から小学校2年までの5年間に亘る縦断的研究—」日本発達心理学会第20回大会，日本女子大学。

長田瑞恵・関口はつ江・野口隆子（2010）「幼稚園時の発達と小学校適応との関連（3）—幼稚園時の発達と小学校教諭による評価との関連—」日本発達心理学会第21回大会，神戸国際会議場。

仙田満（2005）「子どもの居場所—その重要性と安全性（特集：子どもの生活環境）」発達，104（26），54-58

小学校生活調査（1年生1学期）

お子様のお名前（男・女）小学校名

〔下記について、1学期をふりかえってあてはまる番号に○をつけてください。またお気づきのことがありましたら（ ）内にお書きくださいますようお願いいたします。〕

1 入学後の欠席日数（1学期）

1 なし 2 欠席あり（ ）日

2 入学後の身体的状況

1 極めて良好 2 良好 3 ふつう 4 疲れ気味 5 疲れている
お気づきのこと（ ）

3 現在好きな科目に○を、嫌いな科目に×をつけてください。（いくつでも結構です）

1 国語 2 算数 3 体育 4 図工 5 音楽 6 生活

4 宿題や学校の支度は自分でしますか。

1 全く手がかからない 2 手がかからない 3 時々手がかかる 4 手がかかる
5 大変手がかかる
お気づきのこと（ ）

5 学校でのことを自分から話しますか。

1 自分からよく話す 2 かなり話す 3 聞くと話す 4 聞くと少しは話す
5 話さない
お気づきのこと（ ）

6 学校のことはどの様なことを話しますか。出てくる話題をいくつでも書いてください。

（例 給食がおいしいこと、友達の噂など）

7 学校での友達関係はいかがですか。

1 とてもよい 2 よい 3 どちらともいえない 4 あまりよくない 5 よくない
お気づきのこと（ ）

8 学校は楽しそうですか。

1 とても楽しそう 2 楽しそう 3 どちらともいえない 4 楽しくなさそう
5 全く楽しくなさそう 楽しい、楽しくない、の理由がわかる場合はお書きください。
（ ）

9 先生には馴染みましたか。

1 入学後すぐに馴染んだ 2 学期半ばで馴染んだ 3 最近馴染んだ
4 まだ少し馴染まない 5 全く馴染まない
お気づきのこと（ ）

10 勉強は楽しそうですか。

1 とても楽しそう 2 楽しそう 3 どちらともいえない
4 楽しくなさそう 5 全く楽しくなさそう お気づきのこと（ ）

11 勉強は易しそうですか。

- 1 とても易しそう 2 易しそう 3 どちらともいえない
4 難しそう 5 とても難しそう お気づきのこと ()

12 次のことに関して、幼稚園の時と比べて変わりましたか。**①生活時間**

- 1 とても規則正しくなった 2 規則正しくなった 3 変わらない
4 不規則 5 とても不規則 お気づきのこと ()

②食事

- 1 よく食べるようになった 2 食べるようになった 3 変わらない
4 食べなくなった 5 全く食べなくなった お気づきのこと ()

③片づけなどの身の回りの生活習慣

- 1 とてもよくなった 2 よくなった 3 変わらない
4 悪くなった 5 とても悪くなった お気づきのこと ()

④遊びや物事への興味関心

- 1 とても意欲的になった 2 かなり意欲的になった 3 変わらない
4 無関心になった 5 とても無関心になった お気づきのこと ()

⑤心の状態

- 1 とても落ちついて安定している 2 落ちついて安定している
3 変わらない 4 いらいらしたり不安定 5 とてもいらいらしたり不安定
お気づきのこと ()

⑥お母様お父様に対して

- 1 とても自立的 2 少し自立的 3 変わらない
4 甘えたり依存する 5 とても甘えたり依存する お気づきのこと ()

13 小学校入学時にお子様が無かったのはどのようなことですか。

14 先生から褒められたり、注意されたりしたことがありましたら、その内容をお書きください。

15 入学前の予想と異なっていたことやお子様の学校生活についてのご感想などがありましたらお書きください。

16 学校や担任の先生にお願いしたいことがありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました